

<第二章>音読指導 Q&A

2.1 音読指導はなぜ必要か?

◆文章を黙読して理解するまでの過程

- ①眼球による文字知覚
- ②その文字の塊（単語）を長期記憶内のスペリング情報の中から検索・照合する
- ③それを頭の中で音読する
- ④その単語の意味を想起する

という順で単語認知が行われ、次に統語、意味、スキーマ、談話などの処理が行われて文章の意味を理解する。

文章理解には①～④の処理が高速に行われることが不可欠であり、これを可能にするのが音読である。音読により、スペリングと発音の結びつきを強化し、学習した語彙や文法などを内在化できる。

→音読により文章理解のための処理が高速化し、文書理解力と発表能力の基礎ができる。

2.2 音読指導の現状と問題点

2.2.1 音読指導の現状

音読指導は現状、十分になされているとはいえない。

◆なぜ音読指導の時間を確保できないのか

- ・ 不要な説明や板書が多い
- ・ 教材（教科書）の選択段階で、生徒の学習段階よりもかなり高い教材が選ばれている
- ・ 量をこなすことが大切だという考えから来る進度優先主義

2.2.2 音読指導の問題点

- ・ 音読の目的が不明確な授業や、授業の中での位置づけや用いられている音読指導法が不適切である場合が多い。
- ・ 大半の音読は意味や状況を考えず、聴き手を意識していない。
- ・ 音読指導だけで終わらせてしまう。

2.3 音読にはどんな効果があるか?

2.3.1 音読の比較的短期間の指導効果

七野(2006)と高橋(2006,2007)の研究は、教師またはCDの音読をペースメーカーにして教材の英文を黙読させながら内容を理解させた後、反復して音読させる指導法が英語表現の定着や要約文の作成に効果があることを実証している。

2.3.2 音読の長期間の指導効果

半年から1年の長期間の音読指導の効果を実証した研究。(p. 16)

2.3.3 記憶効率に対する効果

川島(2003b)は英語力を伸ばすだけでなく記憶効率もアップすることを実証している。

2.4 シャドーイングやパラレル・リーディングにはどんな効果があるか?

1. 既習項目の検索（アクセス）を容易にするため

◆ 「単に知っている」状態から「定着した状態」にするには …

リーディングの場合

文章を流暢に読むためには単語の音韻処理が自動化、高速化されることが必要になる。

パラレル・リーディングは英文を見ながら音声の復唱を繰り返すため、これを何度も行うと徐々に頭の中での音声変換もスムーズに行えるようになり、意味検索に至る単語の処理過程全体の自動化につながるという効果が期待される。(p. 18 図5)

2. 音声、単語、文法知識の強化及び内在化

① 音声面での強化（既存の音声知識の精緻化）

② 文字－音声のリンクの強化

③ 単語－音声－意味のリンクの強化

④ 統語知識の内在化

※このような効果を得るには学習者のレベルに適した語彙で構成され、適切な速度で読まれるモデル音声を提供する必要がある。また実際に指導する場合、様々な復唱訓練を組み合わせることで英語の音韻処理能力の向上を図る必要がある。

2.5 音読は入試対策として効果があるか?

音読はリスニング力や理解を伴ったリーディング・スピードの向上、英語表現の定着やサマリーの作成にも効果的である。

→音読は入試対策として非常に効果がある。

鈴木(1998b)、安木(2001) や 2.3 で紹介した渡辺(1990)、鈴木(1998b)、七野(2006)、高橋(2006,2007)、Miyasako(2008) などの研究からも証明されている。

2.6 音読・シャドーイングの指導の留意点

p.22 を参照

2.7 フォニックスはなぜ必要か?

フォニックス指導：アルファベット文字を読む基本的仕組みを理解させ、定着させることで、頻出する語を速く正確に読む力と、未知の単語の読み方を予測する力を養う。

日本語と英語の読み書きの仕組みが大きく異なることや、英語の読み書きを短期間で学習しなければならない現状を考えると日本の英語教育においてこそ、体系明示的なフォニックス指導とできる限りの大量の英語の音や文字に触れさせる指導法をバランスよく組み合わせ合わせた活動 (Balanced Approach) は不可欠である。

2.8 音読指導は授業の中のどの段階で行えばよいか?

音読指導は内容理解後と、復習 (前の授業の復習、一つの課が終わった時点など) の段階で行うのが効果的。しかし実際は内容理解前に音読が行われる場合がかなり多い。

◆内容理解前に音読を行うべきでない理由

- ・音読ができない生徒たちは一度音読を行ったくらいでは自分で音読できるようにはならない。また黙読時に頭の中で音読しながら黙読することもできるようにはならない。
- ・内容理解前に音読しても内容理解が進まない。

◆頭の中で音読ができない生徒たちには英文の内容を理解させるには

- (1) 教材の英文の内容に関する質問を 1,2 問ずつ与える。
- (2) 句や節単位にポーズを入れた朗読を聴かせる。

(3) 生徒はその朗読を聴きながら黙読する。

(1)~(3)を繰り返して内容を理解させていく。またこの手法はスペリングと発音を結び付ける効果、内容理解の効果も期待できる。

2.9 英文をモデルなしで音読できるようにするには？

2.9.1 単語レベルの練習

・自分で単語を読んだ後に、正しい発音を聴き、復唱する練習を行う。このような練習は誤った読み方が定着してしまう前に行うのが効果的。

正しい読み方を理解したら、読む速度を向上させる練習をする。(フラッシュカードなどを使用する。)

2.9.2 文及び文章レベルの練習

◆文または文章の音読をさせる前に行っておくべきこと。

①英文の内容理解

②単語及び句レベルの音読練習

③文または文章レベルの音読ができるようになるための準備活動

これらを行った後、リード・アラウド・リッスン・アンド・リピート(p.38)などを行う。

2.10 「音読に適した教材」のみ音読させるべきで、入試長文問題のような音読に適さない教材は音読させない方がいいのでは？

大学入試に出題される長文や新聞記事を読んで理解したり、日常会話レベルを超えた内容のある発話を理解するには、瞬時に文法や語彙、構文を認知できる言語処理能力が必要である。これらを強化するためにも、入試長文問題を含めて教室で教師が指導する精読や精聴用の教材の英文は、会話文、詩、物語文に限らず、説明文であっても、生徒に音読させる必要がある。

→入試問題の英文も(むしろ入試問題の英文こそ)音読させるべき。

2.11 色々な音読指導法をどのような順序で用いればよいか？

pp.28-30 を参照。

感想・考察

この章で最も印象的だったことは大学入試に使われる教材も音読に採用することができるという点である。私が高校生だった頃はこのような音読はほとんど行われなかった。その時は自分も音読をするよりも問題を解いていた方がいいと思っていた。音読の有用性をもっと強調して欲しかったと思う。

英語を指導する教師には音読の有用性を生徒に対してしっかり説明し、音読を今よりより積極的に取り入れて欲しい。